

# SDGs を取り入れた英語プレゼンテーションの授業

土屋 進一

## 1. SDGs と英語プレゼンテーションの授業

筆者は、コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲの授業において、読み取った英文の内容と関連させ、さらなる深い学びを促すため、学期に1度の英語プレゼンテーションの授業を行っている(土屋, 2019)。高校1年次より段階的にレベルを上げ、最終的に高校3年次には、それまで培った知識や学びの集大成としてSDGsと関連したプレゼンテーションを行っている。ここでは、近年注目を集めているSDGsを取り入れた英語プレゼンテーションの授業を紹介したい。

SDGsとは、Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略称で、世界が抱える問題を解決し、持続可能な社会をつくるために世界各国が合意した17の目標と169のターゲットからなる(図1)。

コミュニケーション英語Ⅲの授業では、通常、600～800 wordsの社会的なテーマの英文から必要な情報を読み取り、読み取った内容に関して理解を深めたり意見を発信したりする活動を行っている。このような授業をさらに発展させるため、生徒に読み取った内容と関連したトピックをSDGsの17のカテゴリーから2つ選ばせ、「世界をよりよくするためには」というテーマのもと、資料をリサーチしプレゼンテーションをさせた。約2ヶ月間のプロジェクト型学習(Project-Based Learning, PBL)である。



(図1)

## 2. 教科横断的に英語の学びをリアルな社会につなげる

新学習指導要領が目指しているものの1つに教科横断の考え方があろう。Society 5.0などの時代の変化を見据え、授業の中で得た知識・技能を実際のリアルな社会につなげることを考えると、教科・科目を単独で学ぶのではなく複数の教科を横断しながら、生徒が自らの興味・関心に沿って深い学びを行っていくことが重要であると考えられる。例えば、ある生徒は、フードロスの問題をテーマとして選び、該当するSDGsの3つの目標(No.2 飢餓をゼロに、No.13 気候変動に具体的な対策を、No.15 陸の豊かさを守ろう)から、それぞれ地理、地学、生物へと教科横断的な深い学びにつなげた。その際、まだ邦訳が出ていない最新の資料に関しては、英文の資料を読み、理解を深めたという。これは、新学習指導要領の資質・能力の「三つの柱」(実際の社会の中で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」)を秀逸に含んだ具体的な活動と言えるのではないだろうか。

## 3. リアルな社会に対し自分の考えを英語で発信する

プレゼンテーションの原稿準備に際して、生徒は、リサーチの段階で得たリアルな社会の現状を「自分ごと」としてSDGsのそれぞれの目標に照らして英語で表現していく。まず、論理展開が示されたワークシート(図2)に各自が選んだSDGsの目標2つを切り口として、①興味・関心の理由 ②問題の現状分析 ③問題に対する解決策の流れに沿ってライティング活動を行う。

次に、パワーポイントのスライドに画像とキーワードを貼り、プレゼンテーションの準備をする。最後に、効果的なプレゼンテーションを行うために各

自で練習する。これが、単なる英会話レベルのスピーキング練習とは意を異にするリアルな社会へ向けての発信型のスピーキング活動となる。言語が英語であれば全世界へ発信できることも、生徒にとってリアルに社会とつながる感覚を与えることになる。

**Project-based Learning (Presentation based on SDGs)**

3年次 組\_\_\_\_番 氏名\_\_\_\_\_

**1. 課題主題**

①興味・関心のあるテーマをリサーチする。  
②SDGsのカテゴリーから2つの切り口を選ぶ。  
③その他の素材(CNN, BBC, TED talks, 英語論文など)で深める。  
④解決策を自分の意見としてまとめる。(これまでにないアイデアなら、なお良い。)

**2. ワークシート**

知	Keywords	
る	SDGs (Number, Reason)	No. : . . . No. : . .
考 え ら れ る ・ 探 め ら る	The problems are	. . . .
行 動 す る	Your solutions	. . . .

(図 2)

#### 4. 話すこと [やり取り] に向けて

新学習指導要領では、これまでの4技能が4技能5領域となり、「話すこと」が「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」の2つに分かれた。本校では先取りとして、表1に示すように、高校1年次では生徒に話すこと [発表] に集中させ、高校2年次では段階的にレベルを上げ、話すこと [発表] の後に内容に関してALTとJTEが質疑応答を行い、生徒に即興での話すこと [やり取り] を求めた。それをさらに発展させ、3年次では質疑応答の形で生徒同士の話すこと [やり取り] を求めた。

学年	1年次			2年次			3年次
学期	1学期	2学期	3学期	1学期	2学期	3学期	1学期
話すこと [発表]	正確にわかりやすく伝える			自分の考え・意見を述べる			論理的で説得力のある発表をする
話すこと [やり取り]				ALT・JTEによるQ&A			生徒同士によるQ&A

(表 1)

3年次の生徒同士の話すこと [やり取り] はハードルが高いと思われたが、なんとか生徒同士で英語でのやり取りができ、発表者とオーディエンスが一体となったプレゼンテーションの授業を行うことに成功した。それは、このような生徒間の話すこと [やり取り] に向け、1年次より「話すこと」を無理のない形で段階的に指導した成果が結実した瞬間であった。またそれと同時に、他の生徒の発表を聴き質疑応答という形でやり取りが生じることで、自分がリサーチした分野がより深まったり、新たな学びにつながったりすることも話すこと [やり取り] の効用の1つであると感じた。

#### 5. おわりに

教材と学習者の距離を近づけ、学びをいかに「自分ごと」として深められるかは、教師としての重要な役割の1つであろう。普段、教科書で扱っている題材をSDGsの17の目標の視点から学習すると、生徒がリアルな社会を知るきっかけとなり、「思考力・判断力・表現力等」を育むことにつながろう。

今後も、英語の学びを社会につなげることで、生徒の動機づけを高め、予測できない社会の変化や地球規模の課題と向き合うことのできる人材を育てていきたい。

#### 参考資料

文部科学省(2018). 「【総則編】高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説」  
 土屋進一(2019). 「主体的で深い学びを促す英語プレゼンテーションの授業」『英語教育』6月号. 大修館書店.

(西武学園文理中学高等学校 教諭)